NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　序

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15224694

ダイの大冒険, アバン, 勇者アバンと獄炎の魔王

少年アバンと彼の「先生」。
長編スタート。最後まで、頑張ろう、自分。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　序

[chapter:序章　先生
]
　大切なもの、スケッチブックとえんぴつ。
　大きなリュックサックの中身は、ハムとチーズ、レタスにパン。果物少々。
　でもこれは僕のお弁当じゃない。
　今日は日差しが強いから、日よけの麦わら帽子も欠かせない。
　水筒も持って行かないと。
　少年アバンはすっかり荷造りを終えると、ジニュアール家の広い屋敷を抜け出し、森へと出かけて行った。

　森の中には、ところどころ、日の光が地面までさす、ぽっかりとした空間があることは、アバンはここ数日の調査で知っていた。
　そう、これはれっきとした調査だ。
　たとえ、執事に怒られようとも、叔父に呆れられようとも、母に泣かれようとも、真実を探究するのは崇高な使命である。
　誰に語るでもなく、まだ６歳の少年アバンは心の中で強く思っていた。
　大人から見れば、取るに足らないようなことの中にこそ、この世の真実が隠されているのだ。
　その使命を、誰にも邪魔することはできない。
　少年アバンは、強い決意を胸に、森の中へと駆けて行った。

　アバンは、森の中、日差しの差しこむ空地へと行き、そこに昨日置いたものがどうなっているのかを確認した。
　昨日、ここには、パンとレタスとチーズとハムを置いた。
　見ると、パンとレタスはなくなっているが、チーズは、溶けたまま、半分くらい残っていた。ハムはそのまま丸ごと残っている。
　ふむ、とアバンはその意味を考えこんだ。
　そして、自分の目で確かめようと、リュックサックの中からパン

とレタスとチーズを取り出した。
　パンとレタスとちぎって、それぞれ、少し離れたところに置く。
　昨日は置かなかったリンゴの切れ端も、やっぱり少し離れて置いてみる。
　アバンは、自分もその場から離れて、木の陰に隠れた。
　パンとレタスを置いた場所から目を背け、ときどき、ちらちらと横目で見る。自分はなるべく気配を消して、ここには誰もいませんよーという空気を作り出す。
　いつでも描けるように、スケッチブックとえんぴつは装備だ。
　準備万端。
　いつでも来い。
　アバンはじっと動かずに、気配を消しながら、パンとレタスとチーズとリンゴとハムを置いた方向を横目で見ていた。
　すると、がさがさと音がした。
　背の高い下草が動き、その奥からひょっこりと、小さな影が顔を出した。
　スライムだ。
　よく見る、青くてぷるぷるとした生き物。目が大きくてかわいらしい。
　青いスライムは、きょろきょろとあたりを見回しながら、そっと、アバンの置いたパンのほうへと近寄って行った。
　そして、青いスライムは、パンの前で止まり、そこでぷるぷると体を震わせた。
　しばらくすると、その青いスライムは、体を震わせながらどこかへと行ってしまった。よく見ると、パンが少し減っていた。
　アバンは、その様子を横目で見ながら、スケッチブックに青いスライムを描いた。パンと一緒に。
　やがて、がさがさとした音とともに、あちこちから、何やら小さな生き物が寄ってくる気配がした。
　アバンは邪魔にならないようにじっと息を殺した。
　次に目に入ったのは、オレンジ色のスライム。
　緑の、溶けたみたいなスライムもやってきた。
　青いけれども、手足の長いイカみたいなスライムもやってくる。

—あ、珍しい！
　アバンは危うく声を上げそうになった。
　見ると、銀色のスライムが、青や緑のスライムに交じってやってきていた。
　どの個体も、お気に入りがあるのか、パンやレタスに寄って行く。リンゴは初めて持ってきたけど、これも好評みたいだ。
—ハムは減りませんね・・・。
　アバンは、ちらちらとスライムたちの様子を見ながら、その姿を順にスケッチしていった。彼らが食べた食べ物とともに。
　ふと、スライムたちが一斉に顔を上げた。
　何かの気配に気づいたように、さあっと森の奥へと姿を消していった。
　アバンが不思議に思っていると、アバンの背後から、がさがさと木々を揺らして、長い影が現れた。
「こんなところにいたのか、アバン。」
　その姿を見て、アバンは顔をほころばせた。
「あ、先生！」
「先生はよしてくれよ。俺はただの魔族だ。」
「でも、知らないことを教えてくれる人は、みんな先生だって、叔父さんが言っていました。」
「・・・お前も真面目だな。」
　自らを魔族だと称した男は、苦笑して、アバンの横に腰を下ろした。
　男の容貌は、アバンと同様の点も多かったが、その肌の色は、不自然に青みがかっており耳も先がとがっていた。その見た目からして、人間とは異なる、魔族と呼ばれる種族であることはすぐに分かった。ただ、髪の色だけは、人間でもよく見かける金の色をしていた。
　彼は、アバンの手にしているスケッチブックをのぞき込んだ。
「よく描けているな。」
　褒められたアバンは誇らしげに胸を張った。
「これはただのスケッチじゃないんです。なんと！それぞれのスライムの大好物と一緒に描いてあるんです。」

確かに、それぞれのスライムとともに、パンやリンゴ、レタスの絵が描かれている。アバンとしては、そのスライムの好物を描く、という方が重要だったのだろう。
魔族の男は、感心したような声をあげた。
「ほう・・・スライムの食性か。」
「食性？」
「まぁ、簡単に言うと、その生き物が何を食べるかってことだ。」
魔族の男は、幼いアバンにもわかるようにごく簡単な言葉で説明をした。
アバンは、研究の成果を発表した。
「パンとレタスとリンゴは、どのスライムもよく食べています。でも、ハムは食べないんですよ。野菜がいいのかなあとも思ったんですが、チーズはちょっと減っていて・・・。ほかの生き物が食べたのかもしれないんですけど。」
「ふうん。」
魔族の男は、アバンによるスライム食性研究結果の発表を聞きながら、アバンが置いたと思われる、パンやレタスやリンゴを見た。
確かに、これらはよく食べられていて、残りもあとわずかだ。
対して、ハムは手付かず。
「ハムは昨日置いたんですよ。」
魔族の男の視線に気づき、アバンはすかさず説明をした。
だが確かに、ハムの横のチーズは、溶けているが、ハムに比べてだいぶ量が少ない。
アバンは首をかしげながらつぶやいた。
「スライム以外も、ここ、出るのかもしれませんけど。」
だが、魔族の男の反論にあった。
「臆病なスライムが、ほかのモンスターの縄張りに出るとは思えんがな。」
「じゃあ、溶けちゃっただけでしょうか。」
きわめてどうでもいい、「スライムはチーズを食べるか」というアバンの研究テーマに対して、魔族の男は、一応、真摯に向き合っていた。
魔族の男はアバンに尋ねた。

「チーズ、どのくらい置いたんだ？」
「あの倍くらいです。」
「ふうん・・・。
アバン、今日、ハム持っているか？」
「ありますよ。食べますか？」
「いや、俺じゃなくて。」
　アバンは、大きなリュックサックの中を探り、油紙で包まれたハムの塊を取り出した。
　魔族の男は、それを受け取ると、腰のナイフを抜き、近くの岩をまないたよろしく、その上で器用に切っていった。
　その切れ端の一つを、特に細かく、丁寧に、みじん切りにしていく。
　そして、細切れになったハムを持って、アバンがパンを置いたあたりに行き、パンの横に、ハムのみじん切りを小山のような形にして置いてみた。
　アバンは不思議そうに首を傾げた。
「先生？」
「ん？まぁ、見てなって。
あ、残り、おまえにやる。」
　そう言って、魔族の男はアバンのところに戻り、アバンにハムの切れ端を差し出した。
　アバンは、それを受け取ると、迷わず口に放り込んだ。
　しばらくの間、二人がじっとしていると、また、がさがさと下草がざわめく音がした。
　ひょっこりと、見慣れた青いスライムが顔を出し、きょろきょろとあたりを見回した。そして、ぷるぷると体を震わせながら、パンへと近づいていく。
　やっぱりパンを食べるじゃないか。
　アバンがそう思ったときだった。
　今度は、別の青いスライムが草むらから顔を出した。
　そして、やっぱりぷるぷると体を震わせながら、前へと進む。そのスライムは、なにかに気づいたようにハムの前で立ち止まった。
　スライムは、ハムの前で、ぷるぷると体を震わせている。

そして、そのスライムが通り過ぎたときには、ハムの小山が崩れていて、明らかに分量も減っていた。
「あ！」
　アバンは、驚きに声を上げた。
　だが、慌てて口を両手で押さえた。
　驚いた表情で、アバンは、魔族の男を見上げた。魔族の男は自慢げな笑みを浮かべていた。
　アバンは尋ねた。
「先生、あの子、ハム食べました。何でですか？」
「さあ、なんでだと思う？」
　男は答えない。仕方がないのでアバンは自分で考えた。
　ハムの種類は昨日アバンが置いたものと一緒。違うのは、切り方だけ。
「・・・細かくしたから？」
　アバンの答えに魔族の男はうれしそうに笑った。
「そうだろうな。お前が置いたハムは、大きくて食べられなかった、ってことだ。」
　魔族の男はさらにアバンに問うた。
「つまり、スライムの食性は？」
「雑食です！」
「そのとおり。」
　アバンはうれしそうに頬を紅潮させた。
　だが、すぐに何かに思い当たったようで、頬を膨らまして不満げな顔をした。
「先生、知ってたんですか？」
「ん-、スライムが雑食てのは聞いたことがあったからな。あの口の形だし、歯がないだろ。柔らかい溶けたチーズはともかく、あのハムじゃあ無理だろうなって思っただけさ。俺もスライムに対するハムの食わせ方までは知らんよ。」
「でも、雑食だって教えてくれても。」
「そんなの、面白くないだろ。」
　魔族の男は、短く、当たり前のことのように答えた。
　そうして彼は、アバンの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「お前は、自分で調べて実験して観察して、そうやって確かめないと納得しないだろ。なあ、ジニュアール家の跡取り息子。」
　魔族の男は、穏やかな眼差しでアバンを見ていた。その目は、どこか懐かしそうな色を帯びていた。
「お前の親父も、そうやって、何でも自分でやってみないと気が済まない男だった。学者肌ってやつだな。お前は、あいつによく似ている。」
　アバンは、亡き父に似ていると言われ、嬉しくなった。
　先代のジニュアール子爵。若くして彼が亡くなったのは、昨年のことだった。
　ジニュアール家の家督は、一人息子のアバンが継ぐことになっていたが、カールの成人年齢である１６歳を迎えるまでは、その爵位は、彼の叔父、つまり、先代の弟が預かっていた。
　この魔族の男は、どういういきさつでかはわからないが、アバンの父とは友人関係にあったようで、父が亡くなったいまも、時折、その墓に参ってくれていた。
「お墓参りは、もういいんですか？」
　アバンは尋ねた。
「ああ。
お前が引き留めてくれたから、今回はちょっと長居をしたな。十分あいつとも話せた気がするよ。」
　それは、彼の用件は済んだのだから、もうすぐこの屋敷を発つということを意味していた。
　アバンは残念に思う気持ちを抑え、にっこりとほほ笑んだ。
「それはよかったです。
私も、いろいろ教えてもらえてうれしいです。
また旅の話を聞かせてください。
地上のお話だけじゃなくて、魔界のことも。」
「そうだなあ・・・。」
　魔族の男は曖昧に答えた。
「そろそろ屋敷に戻るか。また、アバンがいないって屋敷中、大騒ぎになっているかもしれないぞ。」
「はーい。」

アバンは素直に返事をすると、大きなリュックサックに、本日の研究成果が書かれたスケッチブックと、その成果を支えたえんぴつをしまった。
　リュックサックを背負うと、小さなアバンにはアンバランスで、少し後ろに引っ張れば倒れてしまいそうに見えた。
　屋敷までの道すがら、アバンは次の研究テーマを披露していた。
「この前は、毒消し草も置いてみたんですけど、人気なくて。」
「においが強すぎたんじゃないか。香草の一種だしな。」
「ええ、それに、あれ、茎が固いんです。
でも今日ので分かりました。はっぱをちぎって固い茎を取って、細かくして、チーズに混ぜればいいんです！」
「ずいぶん頑張るな。それをどうするんだ？」
「あの、緑色のべちょっとしたスライムに食べさせたいんです！」
「・・・ん？」
「あの緑色のべちょっとしたスライム、触るとかぶれるんですよ。毒持ちなんです。それが毒消し草を食べたらどうなるのかと思いまして。」
「・・・お前って、変なこと考えるよな・・・。」
　魔族の男は、呆れたようにつぶやいた。

　翌朝、アバンが目を覚ますと、魔族の男はすでにジニュアール家の屋敷を発った後だった。
　このころのアバンには知る由もなかったが、地上で暮らす魔族は、人間とは深く交わらない。人里離れたところに魔族の村をひっそりと構えているか、あるいは旅に生きるかで、そもそも人間の町や屋敷に長居をすることは稀だった。
　アバンは、「先生」と呼ぶ亡き父の友人、旅で渡った地上の様々な知識や魔界のことまでをも語ってくれる魔族の男が大好きだった。彼との語らいは、自分の中の「知りたい」という気持ちが満たされていくようであった。
　ふと、アバンは、自分の部屋のデスクの上に、見慣れない本が1冊置いてあるのに気付いた。
　アバンの部屋には、寝台だけではなく、しっかりとした白木の勉

強机が置かれており、アバンはそこで本を読んだり、工作用の図面を引いたり、時には何やら怪しげな実験もやっていた。
　その子供にしては本格的な机の上に、やたら分厚い、これで人でも殴れそうな見慣れない本が置いてあった。
　アバンが手に取ると、ずっしりとした重みを感じた。
　その表紙に書かれた文字に気づき、アバンは驚いた。
　アバンは、その表紙の文言を読み上げた。
「・・・λεξικό（レキシコー）・・・。」
　魔界の古い言葉で、「辞書」という意味だった。
　表紙の下に、短い手紙が挟まっていた。
「Μελέτη！（勉強しろよ！）」
　アバンが読めると信じているのだろう。わざと魔族の文字で書かれていた。